読む力の育成をめざして

――説明文教材を通して――

山田裕子

一、はじめに

教師になって二年目、教員生活にも少し慣れてきたところで、一年生の担任となった。騒がしいばかりで何もわからない子どもたちに、いろいろなことをどう指導していったらよいのか、また、指導の仕方ひとつで、どうにでもなっていく子どもたちを前に、私の指導で子どもたちは育っていくのだろうかと、とても不安であった。しかし、逆に考えるとそれだけ、やりがいがあるということである。責任を持って指導にあたらなければと強く感じた。

一年生では、生活・学習ともに、最も基礎的・基本的なことを身につけさせることが、とても大切である。そして、それを教科で考えた場合、一番の基礎となるのは国語であると言える。したがって、この一年、国語に重点をおいて指導していきたいと考えた。

二、テーマについて

本校の国語部では、〝説明文の読みを通して確かな読みの力をつける〟をテーマに次のような子どもの姿を願って、研究を進めている。到達目標は次の通りである。

①一語一文に反応しながら読める子
②要点や要旨が読み取れる子
③書きぶりの良さがわかる子
④自己の表現に生かせる子
⑤学習方法を身につけた子

書かれている事柄を読みとる力というのは、国語ではもちろんのこと、他教科とも深くかかわってくる。基礎・基本を身につけさせる一年生にとって、読む力を育てることは、非常に重要であると考える。

学習指導要領の第一学年の目標の(2)に「書かれている事柄の大体を理解しながら文章を読んだり、粗筋をつかみながら話を聞いたりすることができるようにするとともに、易しい読み物を楽しんで読もうとする態度を育てる」とある。

以上のことをふまえ、「読む力の育成」というテーマを

設定し、実践を試みた。

三、児童の実態と願う姿

入学当初から、個人差が大きく、ひらがなをあまり知らず、書くのも初めてという子から、ほとんどのひらがなを読み書きでき、その上、日記もノート一枚分ぐらいは書けるという子まで、国語力のバラツキが大きい。

本読みをさせても、拾い読みの子、すらすら読んでいるようで、実際は文字をみて読んでいるのでなく、聞きおぼえたのを暗唱している子、本当にすらすら読める子、とさまざまである。しかし、すらすら読める子でも、文章の意味を理解して読んでいるという子はほとんどいない。つまり、音声として読むことはできても、書かれている事柄の意味を読みとることまではできないというのが実態である。本読みはできるが、書かれていることは何かということになると、いったい何のことかわからないということである。

そこで、書かれている事柄の大体の内容を理解できる子どもにしたいと考えた。しかし、意味を読みとる前に、まず、声に出してはっきり読めることが大切である。口を大きく動かして、はっきりした発音で読め、書かれている事柄の大体の意味のわかる子どもを育てたいと考えた。

四、実践の歩み

(1) ドリル的な指導

㋑ 入門期の文字学習

I、ことば作り遊び（文字を生かして使わせる）

ことばづくりふうせんを色画用紙で五つつくり、いろいろと文字をくみあわせて、どんなことばができるか、さがさせる。グループで競争させて、どれだけたくさんのことばができるか、やらせた。

このことば作りによって

。文字と文字をくみあわせると、いろいろなことばができる。一字では意味のなかったものが、くみあわせで、一つの意味をもった〝ことば〟になるということ。

。覚えた文字の確認ができたこと。

。表記上の指導ができたこと。（ex.みづ→みず）

以上のことが指導できた。

II、フラッシュカード兼ことばみつけ

（ことばを早く読めるように）

一日読みの力をつけるために、フラッシュカードをつくり、くりかえし読ませた。はじめは、なかなか読めなかった子どもも、くりかえしやっているとだんだんことばを覚え、はやく読めるようになってきた。

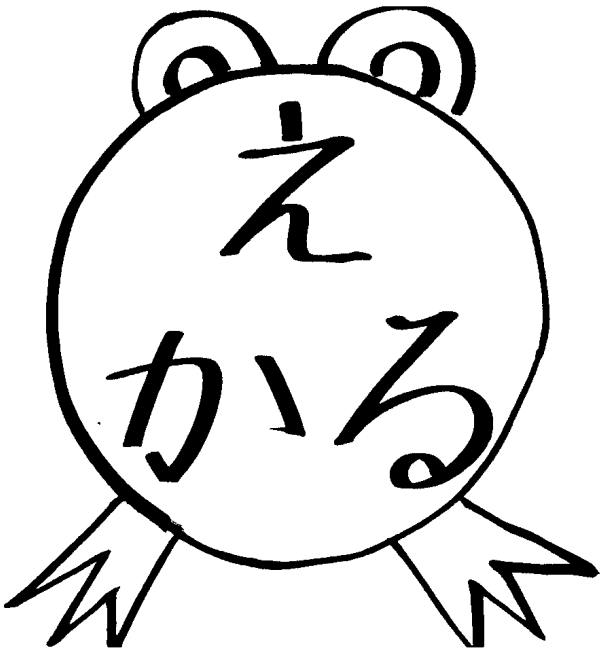
このフラッシュカードはただそれだけではおもしろくないので、どんなどうぶつがかくれているか、さがさせた。

たとえば、うるとらまん ということばの中には、「うま」と「とら」がいる、というように、動物の名前をさがさせた。

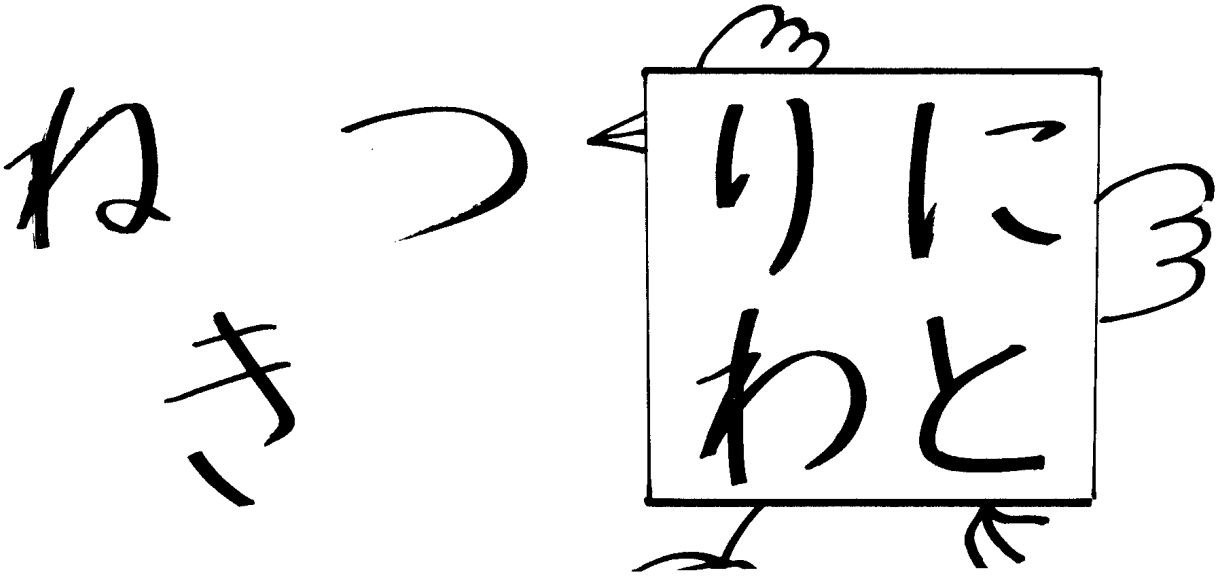
Ⅲ、ばらばらことばさがし（ことばを早く読めるように）

ばらばらにした言葉を一目みて、何のことか、言いあてるのである。初めのうちは、絵がヒントになるような楽しいものを使い、なれてきてからは、文字だけでやった。

（資料1～3）



〈資料１〉



〈資料３〉　〈資料２〉

以上、入門期における文字学習は、文字について興味をもたせ、文字に親しませることができ、効果があった。

㋺ 音読指導

子どもたちの声があまりにも小さいので、まず、大きな声で読めるようにしたいと考えた。大きな声で読むんだよといってもなかなか大きくならないので、口を大きくあけて読むことに力を入れて指導した。しかし、それでも一人で読ませると、なかなか声がだせないので、グループで練習をさせ、四人で声をそろえて読ませた。時には、グループ競争をやらせ、口を大きくあけて読めたらまる一つ、まちがえないで読めたらまる一つとし、○、◎、◎で評価したりした。これは、なかなか効果があり、グループで読む声はずい分大きくなってきた。個人指導では、本よみカードを作り、意欲づけをしてきた。

また、口を大きくあけてと言っても、縦にばかり大きくあけて、横にはあまりあけないで、本読みする（話す）子や、発音がはっきりしなかったり、まちがった発音（例、りんご―じんご、でんわ―れんわ）をする子がいる。全体としても、発音する時の、口の動かし方が不十分なため、はきはきと話したり、本を読んだりすることのできない子が多い。

そのため、アナウンサーの練習で使われるという方法（あえいうえおあお、かけきくけこかこ、させしすせそさそ、たてちつてとたと……）を利用して、発音の練習をさせた。はじめは、口を大きくあけて発音することだけを指導していたが、たとえば、「わえいうえをわを」の発音が、あいまいになったりしているので、少しやり方をかえてみた。「あ」と口を大きくあけて発音したら、一度、口を軽く閉じてから、つぎの「え」を発音するというやり方である。

発音練習を時々、行っていくうちに、音読は、だいぶはきはきと、大きな声で読めるようになってきた。しかし、話しことばは、依然として小さい子が多いので、今後も指導していきたい。

㋩ 視写・聴写

少しでも、書く力がつき、文章理解に視写が役立てばと思い、五分間視写をさせた。これは、文章というものに少し慣れてきた二学期に入ってから始めた。

最初は、個人差を考えてやれるという点で聴写から入っていった。全員が書けるように、ゆっくり時間をかけ、書かせた。この時には、二百四十二字書くのに四十分かかった。

以後、視写にはいっていったが、本のます目と一枚ノートのます目があわないことが多く、子どもがとまどってしまったので、オーバーヘッドを使用してやってみた。一枚ノートと同じます目に、本文を写したものを見せ、視写さ

せた。初めから五分では、短かすぎるので、二十分、十五分、十分、五分とだんだん時間を短かくしていって書かせた。

(五分)	十月二十日	十一月三十日
最低	三十五字	四十六字
最高	百二十七字	百四十九字
平均	五十三字	九十字

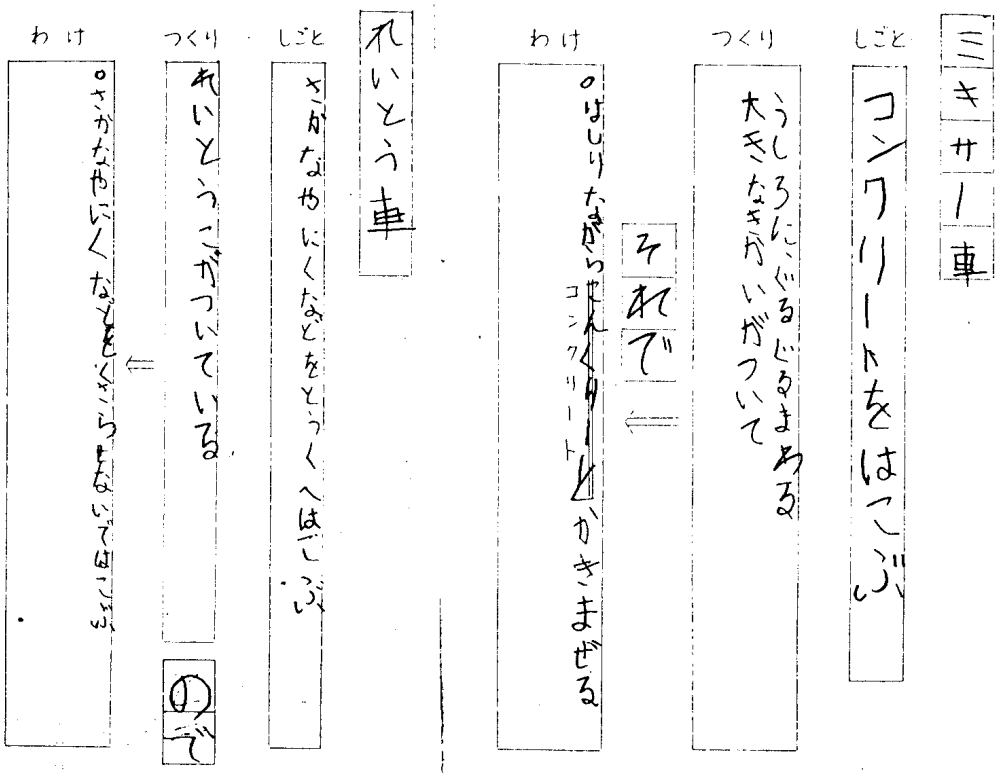
十月二十日と十一月三十日とをくらべると、ずいぶん視写力が伸びてきていることがわかる。書く字も、初めのころにくらべ、おちついて、しっかりした字になってきている。しかし、まだ、中には、はやく書くことだけにいっしょうけんめいで、字が乱雑な子もいる。続けて、指導していきたい。

(2) 説明文での指導

㋑ じどう車くらべ

「じどう車くらべ」では、それぞれの車の仕事とつくりの特徴に視点をあて、その視点から読みすすめていった。実際には、一枚ノートを作り、仕事のわかるところに線、つくりのわかるところに〜〜線をひかせ、ことばにたちどまりながら読み深め、最後に、つくりと仕事をまとめる、という授業形態をとった。

仕事とつくりに線をひかせたのであるが、このやり方は、意外にわかりやすかったようで、子どもたちは意欲的に取りくんだ。



ことばに立ちどまって読むことも、少しではあるが、できるようになってきた。

K・H（授業中の発言より）

かたむくというのはね、ダンプトラックがかたむいたら、ひっくりかえってしまうので、かたむくというのは、にだいがかたむくのだと思います。

㋺ どうぶつの赤ちゃん

1、題材　どうぶつの赤ちゃん

2、目標

◎それぞれの動物の赤ちゃんの様子や特徴を比較しながら読み、書かれている事柄を読みとることができるようにする。

。「じぶんでは」「じぶんで」の含まれる文を視写し、肯定・否定の表現に気付くことができるようにする。

。肯定・否定の表現の役割や文中の語句の役割について正しく理解することができるようにする。

3、指導にあたって

(ア)題材の価値

この題材は、ライオン、しまうま、カンガルーという特徴のある三種類の動物を取り上げ、それぞれの赤ちゃんの生まれたばかりのようす、大きくなっていくようすをわかりやすく説明している。

一年生の子どもたちにとって、動物というのは親しみやすく、興味のあるものである。その上、アフリカやオーストラリアに住む、ライオン、しまうま、カンガルーは、日本では動物園でしか見られないもので、めずらしさも手伝って、より関心のあるものであるといえよう。

百獣の王と言われるライオン。しかし、生まれたばかりの時は、その名にふさわしくないほど、小さくよわよわしい。しかも、自分ではおしっこすらできない。目も一週間ほど閉じていて、二か月ぐらいの間はおちちだけのんでいる。これにひきかえ、弱い動物の仲間に入るしまうまは、生まれた時、すでにやぎぐらいの大きさがあり、目はぱっちり、耳もぴんと立っている。その上、生まれて三十分もたたないうちに立ち上がり、次の日にはもう走れるようになる。おちちだけのんでいるのも、たった十五日ぐらいの間である。また、カンガルーの赤ちゃんは、生まれた時は親ゆびぐらいの大きさで、目も耳もついていなくて、とても未熟な状態で生まれてくる。しかし、このうじ虫みたいな赤ちゃんは、生まれてすぐ、自分の力でおかあさんのおなかの袋に入るのである。

それぞれの動物の生活環境の違いにより、赤ちゃんの生まれた時のようす、育ち方もずいぶんちがうのである。実に、自然とはうまくできているなあと感嘆せずにはいられない。このような動物の意外な事実は、

子どもたちにとって、はじめて知ることばかりであろう。そこで、ここでは、新しい発見の喜びを味わわせるというところに内容的価値をおく。

文章は、「どうぶつの赤ちゃんは、生まれたばかりのときは、どんなようすをしているのでしょう。」「そして、どのように大きくなっていくのでしょう。」という冒頭で始まり、この二つの問題提示文に答える形で、説明が展開されている。それぞれの赤ちゃんの説明は、㋑大きさ　㋺目、耳のようす　㋩親との比較　㋥生まれてすぐのようす㋭おちちを飲んでいる期間　㋬自分でえさをとって食べる時期というように、順序が統一して書いてあり、ライオンの赤ちゃんとしまうまの赤ちゃん、ライオン、しまうまの赤ちゃんとカンガルーの赤ちゃんと、読みくらべていくにもわかりやすい。特に、しまうまについては、すべてライオンとの比較において文章が書かれている。このあたりに、筆者の意図がうかがわれる。したがって、三種類のどうぶつの赤ちゃんを比較しながら読むということに能力的価値をおく。

(イ)児童の実態

これまでに学習してきた説明文教材は、「しっぽのやくめ」「じどう車くらべ」である。「しっぽのやくめ」では、基本的な説明文の型をおさえ、絵と文を結びつけながら、書かれている内容を読みとらせてきた。「じどう車くらべ」では、印をつけるなどしながら、しごととつくりを読みとらせたり、その読みとったことを簡単な図にまとめることで、事かれている事柄の大体を読みとってきた。

音読については、学習時間内に読む時間を位置づけ、口を大きくあけて、はっきり読むことを第一のめあてにして、そのつど評価をするように心がけてきた。

聞く、話すについては、話している人の口を見て話しを聞く、みんなの方をみて話す、ということを指導してきたが、まだ十分には定着していない。

書くことについては、ひらがなの表記はほとんどできるが、助詞や句読点の正しい表記は不完全である。書く力も、個人差がはげしく、自分の思ったことや考えたことをすらすら書ける子や、なかなか書けず、一行二行がやっとという子もいる。そのため、現在、ドリル学習などを利用しながら、視写をさせて、書く力をつけさせるよう指導している。

どうぶつの赤ちゃんに関しての実態は、実際にどうぶつの赤ちゃんを見たことがある子は、十六名である。以下にあげると、

いぬ	五名	ぞう	二名
ねこ	二名	ライオン	一名
しか	一名	うみがめ	一名
うし	二名	きたきつね	一名

うま　一名

である。しかし、赤ちゃんの生まれたばかりのようすを見たことがある子は、このうち、たった三名で、残りはすこし大きくなってからのようすを見たという子ばかりである。

(ウ)指導の力点

一年生の読むことの目標は、「書かれている事柄の大体を理解しながら文章を読む」である。このため、冒頭の問題提示文「生まれたばかりの時は、どんなようすをしているのか」「どのように大きくなっていくのか」という読みの課題をつねに念願におかせ、常にその課題を照らし合わせて、読みすすめができるよう指導したい。

また、子どもたちは、三種類の動物の意外な面に驚きをもつと考えられる。単に個々の動物の驚きにとどまらず、三つの赤ちゃんを読みくらべる中で、さらに新しい事実を発見させ、驚きを深めたい。そうすることができれば、自然の不思議さ、自然の巧みさにも目をむけさせ、興味づけることになると考える。

そのために、

。生まれたばかりの赤ちゃんのようすでは、①大きさ　②目・耳　③おかあさんとの比較で確実に読ませる。

。じぶんで、じぶんではということばに立ちどまらせることによって生長のようすを鮮明に理解させる。

。時間的経過を表す語句を理解させる。

。ライオンの赤ちゃんとしまうまの赤ちゃん、ライオン・しまうまの赤ちゃんとカンガルーの赤ちゃんと比較して読ませる。

4、指導計画（全十五時間）

第一次〈かまえる〉

。題名読みをする。

。新出漢字の読み方と書き方。

。音読練習をする。

。冒頭文を読み、学習の計画を立てる。

第二次〈ふかめる〉

。ライオンの赤ちゃんの特徴を読みとる。

。ライオンの赤ちゃんの生長のようすを読みとる。

。ライオンの赤ちゃんについて表にまとめる。

。しまうまの赤ちゃんの特徴を読みとる。

。しまうまの赤ちゃんの生長のようすを読みとる。

。カンガルーの赤ちゃんの特徴を読みとる。

。カンガルーの赤ちゃんの生長のようすを読みとる。

第三次〈まとめる〉

。全文を読みかえして、三つの動物の赤ちゃんを比べる。

。語句・漢字のまとめをする。

5、文章構成

◦動物の赤ちゃんに関する読み物を読む。
◦評価と言葉の練習をする。

どうぶつの赤ちゃん

カンガルー	しまうま	ライオン
◦おやゆびぐらい ◦目も耳もついていない ◦うじ虫みたい（おかあさんとぜんぜんにていない）	◦もう やぎぐらい ◦目はぱっちり 耳はぴん ◦おかあさんにそっくり	◦子ねこぐらい ◦目や耳は、とじたまま ◦おかあさんにあまりにていない
◦じぶんの力ではい上がっていく ◦ふくろの中でおちちをのむ ◦六か月ほどたつとじぶんでくさ ㋭ たべる	◦じぶんで立ち上がる ◦十五日ぐらい →おちちだけ ◦そのあとはおちちものむが、じぶんでくさをたべる	◦じぶんでは何もできない ◦二か月ぐらい →おちちだけ ◦一年ぐらいたつとじぶんでどうぶつをつかまえてたべる

①生まれたばかりのときは、どんなようすをしているか
②どのようにして、大きくなっていくのか

6、学習活動の実際

〈ふかめる〉 第一場面

ライオンの赤ちゃんは、生まれたばかりのときは、どんなようすか、読みとるところでは、子どもたちは、次のような読みをした。

（一枚ノートよりまとめたもの）

①ライオンはどうぶつの王さまなんだね。　五人
②ライオンの赤ちゃんは、生まれたばかりの時は子ねこぐらいの大きさなんだね。　四人
③ライオンの赤ちゃんてよわよわしいんだね。　二人
④目や耳はとじたままで、見えないし、聞こえないのにだいじょうぶ。　十九人
⑤ライオンの赤ちゃんは、目も耳もとじたままだし、おかあさんとあまりにてないね。　八人
⑥おかあさんは、王さまでつよいのに赤ちゃんはよわよわしいなんて、へんだな。　七人
⑤と⑥の読みをした者は、文と文を関係づけて読むことができていると言える。

（以下子どもの一枚ノートより抜粋・原文のまま）

E・I

ライオンくん、王さまってつよいんだね。それなのに、赤ちゃんはね、おかあさんとね、たくさんちがうことがあるんだね。目はとじたままやしね。耳もとじたままやし、なきごえがちがうんだね。

T・E
ライオンの赤ちゃんの大きさは、子ねこぐらいの大きさってはじめてしったよ。ライオンは、どうぶつの王さまなのにどうして赤ちゃんだけ、よわよわしいの。それに目や耳はとじたままでこまることある。

C・S
ライオンの赤ちゃんは、どうしてよわよわしいの。おかあさんは、どうぶつの王さまというのに、わたしはへんだなとおもいます。

H・K
ライオンの赤ちゃんへ、なんでよわよわしいのか、ぼくは、おかしいなとおもいます。

K・W
おかあさんは、どうぶつの王さまなんだね。でも赤ちゃんは、目も耳もとじているんだね。

C・K
ライオンは、どうぶつの王さまといわれるからすごいね。でも、赤ちゃんはよわよわしいことがはじめてわかったよ。

〈ふかめる〉　第三場面……本時

本時の目標

・しまうまの赤ちゃんは、生まれたばかりの時は、どんなようすをしているかわかる。

展開

(1)前時の学習を想起する。
　①形式段落1～5を読む。
(2)本時のめあてを確認する。
　しまうまの赤ちゃんは、生まれたばかりのとき、どんなようすをしているのでしょう。
　①形式段落6を読む。
(3)しまうまの赤ちゃんの生まれたばかりのようすがわかる。
(4)しまうまの赤ちゃんの絵を通して深める。
(5)学習のまとめをする。

（以下子どもの一枚ノートより抜粋）

K・S
しまうまの赤ちゃん、きみは生まれたときにもうやぎぐらいの大きさなんだね。それで目や耳はとじてないからいいね。そして、しまのもようもついていて、おかあさんにそっくりでいいね。それで、目と耳がライオンの赤ちゃんみたいじゃなくていいね。

T・E
しまうまの赤ちゃん、目がぱっちりあいていてよかったね。だって目がぱっちりあいていたら、ライオンにおそわれても、すぐにげることができるもん。それに、耳がぴんと立っていて、よくきこえて、すぐにげれるからよかったね。

U・E
しまうまの赤ちゃん、きみは、生まれたとき、もうやぎぐらいの大きさで、目はぱっちりとあいていて、耳もぴんとたっていて、おかあさんにそっくりなんだね。そして、ライオンの赤ちゃんより大きいんだね。

M・O
しまうまの赤ちゃん、きみって、ライオンの赤ちゃんとにてなかったからよかったね。もしかすると、ライオンの赤ちゃんとにてたら、耳も目も見えないよ。よかったね。それに、しまうまの赤ちゃん、きみって、もうやぎぐらいの大きさなんだね。

E・I
しまうまの赤ちゃん、きみはね、おかあさんにたくさんにているところがあるんだね。目はぱっちりあいているし、しまのもようもついていて、そっくりなんだね。そして、赤ちゃんは、うまれたとき、もうやぎぐらいって、はじめてしったよ。

M・I
しまうまの赤ちゃん、きみはね、目や耳は、あいていてよく見えるからいいね。それから耳もよくきこえるからいいね。しまうまの赤ちゃんは、うまれたときは、やぎぐらいだったんだね。きみは、ライオンの赤ちゃんより大きいんだね。

M・I
しまうまの赤ちゃんは、目も耳もひらいているからいいね。ぼくたちの生まれたばっかりのときは、しまうまの赤ちゃんとちがって、からだはちいさいよ。

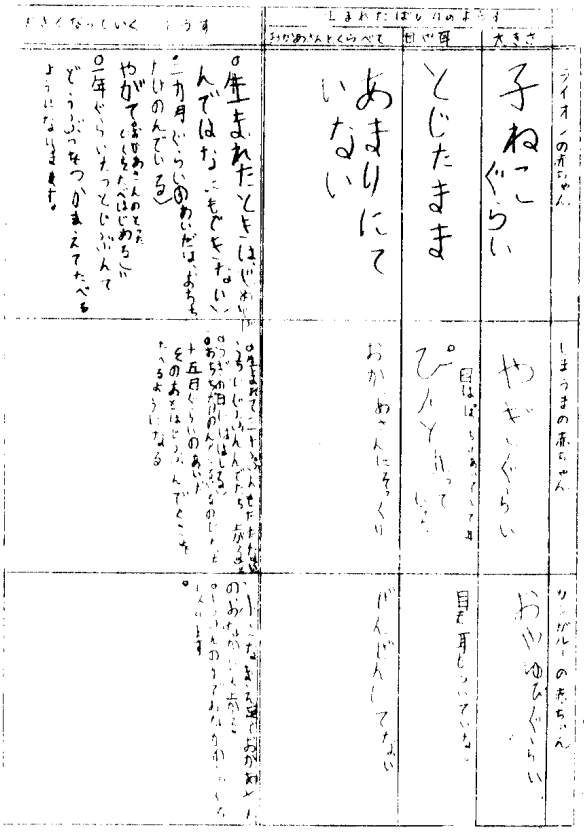
以上、まとめの一枚ノートを見てみると、前や後に書いてあることと関係づけて読んだり、自分の既有知識と結びつけて読んだりしていることがわかる。したがって、ここに掲げた七名の児童は、本当に読みとれているといってよいと思う。その他、ここにはださなかったが、よい読みをしている者が、以前にくらべ、ふえてきていることは確かである。

しかし、その反面、いぜんとして、何を書いていいのかわからない子や、次に掲げるように、一部分のことしか書

けなかったり、内容が読みとれてないなという者がいることもみのがせない。

S・H ―― しまうまの赤ちゃん、生まれたときにもうやぎぐらいの大きさがあるんだね。

K・S ―― しまうまの赤ちゃん、どうして、もうやぎぐらいの大きさがあるの。



五、反省と今後の課題

音読、視写、音読、視写のくり返しによって、わずかであるが、読む力というものがついてきたと思う。しかし、それはくり返し読んで、読み深めていく国語の授業に関してのみ、言えることであると思う。すなわち、自分一人で読む場面、たとえば、ペーパーテストの問題が読めなくて、口で説明すればわかるのに、説明なしでとなると、まだ答えがまったく書けないということが実際にはある。もちろん、限られた子ではあるが、こうしたことが、実生活でなくならない限り、本当の読みの力がついたとはいいきれないと考える。

こうした子どもたちをどのように指導していくかが、今後の課題として残る。

（羽島市正木小学校教諭）

〈付　記〉

。筆者は、昭和五十五年三月の卒業で、現在教育実習にもお世話になる羽島市正木小学校教諭として活躍していらっしゃる本学の先輩です。

。昭和五十七年度の実践記録としてまとめられたものの一部を提供してしただきました。

。原稿にはたくさんの資料をつけていただきましたが、スペースの都合で、そのほとんどを割愛させていただきました。

〈小瀬・記〉